

北原白秋の童謡とその深層心理

笹 本 正 樹

——テキストの快楽の美学を想像することが可能なら、その中に声を挙げるエクリチュールも加えるべきであろう。ロラン・バルト——
(1)

I

多くの童謡を文化遺産として、日本の子供たちに残していった北原白秋のその代表的な作品といえば「赤い鳥、小鳥」であろう。⁽²⁾

白秋がそうした童謡の多産期を迎えたのは小田原伝燈寺境内の「みみづくの家」においてであった。今では、彼の住んだ家のあとは幼稚園となっており、そこに「赤い鳥、小鳥」の碑だけが、残されている。

赤い鳥、小鳥
なぜなぜ赤い
赤い実をたべた

白い鳥、小鳥
なぜなぜ白い
白い実をたべた

青い鳥、小鳥
なぜなぜ青い
青い実をたべた

わたしはかつて、八年がかりで白秋系短歌誌に掲載していた文章が、友人松永伍一氏のすいせんで一本となった。しかし、書き上げた当時まだこの童謡の重要さがわかってはいなかった。
(3)

子供むけに、赤や白や青を配置したということ。人間の基本的欲求である「食べる」ということと、性格形成のようなものを結びつけている。そうしたことぐらいしか、わたしには考えられなかった。だから子供むけにつくった軽い童謡としてしか、とっていなかったのである。

昭和51年の白秋会の席上で、歌人の宮柁二氏が「釈迦空先生が、かつて、白秋は怪物だということを言っておられました、当時わたしはそれがどういうことを言うのか、わかりませんでした。しかし、最近その意味がわかってきたようにも思います」と、あいさつしたのが印象的であった。しかし、どういふふうに怪物の意味を解釈されたのか、残念ながら聞かずじまいでしまいました。あるいは聞いても、語られなかったのかも知れない。

(4)

百冊をこえるといわれる白秋の多産的な業績もさりながら、童謡の分野では、彼が全国の門弟を通じて、資料を蒐集していた仕事がある。「日本伝承童謡集成」全六巻がそれであり、彼の秘書でもあった、詩人の藪田義雄氏によって、総量が公表されたのは昭和51年2月、三省堂によってであった。

その第一巻「子守唄篇」をみると、“北海道東北地方”の童謡の最初に、この「赤い鳥、小鳥」によく似たものが掲載されている。

(5)

ねんねの寝た間になにせよいの、
 小豆餅の椀餅（とちもち）や
 赤い山へ持って行けば
 赤い鳥がつつく
 青い山へ持って行けば
 青い鳥がつつく
 白い山へ持って行けば
 白い鳥がつつく

白秋が「赤い鳥、小鳥」の童謡をつくるときに、この北海道につたわるものを、下地として使ったことについては中村純一氏の「赤い鳥、小鳥、成立考」がある。

赤い山へ持って行けば、赤い鳥がつつく、
青い山へ持って行けば、青い鳥がつつく、
白い山へ持って行けば、白い鳥がつつく。

ここでは、色彩表現が、赤、青、白となっている。それと比較して、白秋の作品では、赤、白、青となっているのである。それは単に偶然に色がおきかかっているだけのことであろうか。

わたしはそうは思わない。白秋においては、どうしても「赤い鳥」「白い鳥」「青い鳥」の順でなければならなかったと仮定したいのである。

II

フロイトが「夢の分析」を書いて80年がすぎた。現在では、すでに超現実主義やアブストラクトの時代がすぎて、ふたたび新しい具象の時代へ入ったようであるが、彼の切り開いた分野は、映像、表象、記号、象徴などの現代情報文化時代の心理分析の重要な手段ともなっている。

それではこの童謡に登場する「小鳥」とは何をさすのであろうか。ちなみに、横浜市立大学臨床心理学の外林大作著「夢判断」といった、小辞典ふうのものを開いてみると、次のように記されている。⁽⁶⁾

〔小鳥〕 一般に、カナリヤのように、小さいかわいい小鳥は女性を、オウムのようにくちばしの鋭い鳥は男性を表わします。また、小鳥によって、親子や夫婦などの関係が象徴されることもあります。小鳥を飼う夢は、その小鳥によって象徴されている人、たとえば、妻を、自分の支配、統制のもとにおきたい、ということです。かわいい小鳥をかごに入れて、餌を与える動作が強調されていれば、自分を小鳥に置きかえてかわいがっている。自慰的、自愛的な表現です。かごの小鳥が逃げる場合は、好意を寄せていた人に裏切られるなど、自分の意図に反した結果が生まれて困惑していることや、よいと思っていたことが、みな反対の結果を引き起こしていることへの悩みを示しています。

それ故、ここで登場する小鳥たちは、北原白秋の妻であった人々を、その心理の深層で意味していたのではなかったか、ということが考えられる。日本のものだけでなく、外国の辞典もあたってみることにしよう。

Ad de Vries の Dictionary of Symbols and Imagery. を開くと、「鳥」の項だけでも三頁にわたって詳細に記されているが、ここでは、そのいくつかの意味を、抜萃し列挙しておくことにする。
(7)

[Bird]

1. in poetic etym (as in colloquial phrase) related to woman 'burd' and 'bride'.
2. many (disgraced) woman were changed either into birds or trees.
3. we often see birds as metamorphosed lovers in fairy-tales.
4. the Celtic god of love, gave kisses which were transformed into birds.
5. madness: "a girl as mad as birds": D. Thomas ("Love in the Asylum"), though there may be a secondary meaning here of sexual heat.
6. Jung: a. spirits, angels, supernatural aid, thoughts and flights of fancy; b. black and white birds: theriomorphic symbols of the self in dreams.
7. Freud: male symbol.
8. winged night-animals: perverted imagination.
9. Sean O'Casey: the instinctive and creative urges which men suppress at their peril, and are associated with sexual love, poetry, music, dancing, and sheer love of living denied by the Domineering Priests.
10. birds choose their mates on St. Valentine's Day: "on St. Valentine all the birds of the air in couples do join": proverb.

これらを参考にして考えてみるに、深層心理における「鳥」とは、男にあって

ては女の恋人（あるいは妻）、女にあっては男の恋人（あるいは夫）を考えた
らよいということがわかる。

例えば、次の寺山修司の短歌の場合は、小鳥とみられるものが、自分であっ
たり、恋人であったりしている。

空のない窓が夏美のなかにあり小鳥のごとくわれを飛ばしむ
撃たれたる小鳥かえりてくるための草地ありわが頭蓋のなかに

（ただし、ここで示される比喻は擬物化の方向のため、リビドーは死に向っ
ている。）
(8)

それはともかく、白秋にとって「赤い鳥」「白い鳥」「青い鳥」は、誰であっ
たかということになると、次のような図式が浮んでくるのである。

赤い鳥——松下俊子（25）

白い鳥——江口章子（28）

青い鳥——佐藤菊子（32）

（カッコ内の数字は、これらの女性が北原白秋と結婚したときの年齢を示し
ている。）

Ⅲ

さて、「赤い鳥」が、白秋の深層心理において、松下俊子であり、「白い鳥」
が江口章子であり、「青い鳥」が佐藤菊子に相当するとすれば、この三人の女
性はどのようなキャラクターであったかを、次に簡単ではあるがみておくこと
にしなければならない。

<赤い鳥としての松下俊子>

松下（本姓、福島）俊子は明治21年5月27日、三重県名張で生まれたとされ
る。育ったのは伊賀上野であるという。父は医師であった。

少女となって、京都の女学校に通う。色白の美しい長身の姿となる。20才の
ときに市会議員の甥、米国に留学して写真術を修得した新聞記者の松下長平と
結婚する。

青山原宿85番地に居をかまえ、女の子を産んだ。白秋（隆吉）が原宿に住む

ようになったのは、俊子が子供を出産した少しのちであり彼女が22才の頃であった。白秋は隣家の若い魅力ある人妻を歌うようになる。彼の作品を通して、その女性を想像することにしよう。

金口の露西垂煙草のけむりよりなおゆるやかに燃ゆるわが恋
君見ずば心地死ぬべし寢室の桜あまりに白きたそがれ
美しきかなしき痛き放埒のうすらあかりに堪へぬころか
春の鳥な啼きそ啼きそあかあかと外の面の草に日の入る夕
君かへす朝の敷石さくさくと雪よ林檎の香のごとく降れ
人妻のすこし汗ばみ乳しほる硝子杯コウジのふちのなつかしきかな
雪の夜の紅きるろりにすり寄りつ人妻とわれと何とすべけむ
代々木の青檜がもとに飛びありく白栗鼠のごとく二人抱きし

これらの作品から、白秋と俊子の関係がわかるというものである。また、詩においても華麗な表現がとられる。

「八月のあひびき」

八月の傾斜面スロープに、
美しき金の光はすすり泣けり
こほろぎもすすり泣けり
雑草の緑もともにすすり泣けり
わがこころの傾斜面スロープに
滑りつつ君のうれひはすすり泣けり
よろこびもすすり泣けり
悪縁のふかき恐怖もすすり泣けり

八月の傾斜面スロープに
美しき金はすすり泣けり

明治45年7月6日、明日は七夕という日に、彼と彼女は姦通罪の汚名のもとに逮捕された。

有夫ノ婦姦通シタルトキハ二年以上ノ懲役ニ処ス、其相姦シタル者亦同じ
(刑法183条, 第1条・第1項)

そのときに、白秋は俊子を次のように歌っている。

哀しければ君をこよなく打擲すあまりにダリヤ紅くくるしき
身の上の一大事とはなりにけり紅きダリヤよ紅きダリヤよ

のちに、白秋は俊子と結婚、三浦三崎にすんだ。大正2年4月から、大正3年7月までいっしょであった。離婚となったのは、派手な彼女が、貧窮生活の白秋を見すてたといっても過言ではない。

生前、北原白秋は碑をたてることをゆるさなかった。しかし、ただ1つ例外として許したものがある。それは俊子と住んだ三浦三崎は見桃寺の歌碑であった。白秋がいかに彼女を愛していたかが、これでわかるというものである。

<白い鳥としての江口章子>

文学少女であった江口章子は、明治21年4月1日、大分県香々地の酒造業、資産家の娘として生まれている。大分県立第一高等女学校では第一の才媛であったと言われている。18才で弁護士のもとに嫁ぐが、夫が遊蕩な性格であったため、のち離婚している。

青踏派の女性として、綾部の郡是製糸の女工となり、その内部より女工解放を叫んだ新しい女でもあった。白秋は大正5年5月より9年7月までの約4年間に、この女性と結婚生活をもった。

この妻は寂しけれども浅茅生の露けき朝は裾かかけけり
おのづから心安まるすべもがと寂しき妻と野に出でて見ぬ
茶の煙幽かなれかし幽かなる煙なれども目に染むるもの
おのづから水のながれの寒竹の下ゆくときは声立つるなり

白秋は彼女によって、文学の関心が西欧的なものから、東洋的な沈静なものに移ってゆくのであった。いわば芭蕉の“わび”“さび”などの趣きをとり入れていく。

のちに、彼女は新聞記者と姦通したということで、白秋から離縁されるが、そのようなことはなかった、と彼女は言っている。

章子は大徳寺に尼僧となるが、発狂状態がしばしば起るようになる。彼女はまた詩人でもあった。

「むらさき」

紫の
夜の葡萄の
ひとふさを
盗みてきくは
三味線の
霧にぬれたる
秋の唄

白の狐の毛ごろもに
魂はつつめど
しらじらと
霧のうごめく
紫野

晩年、半身不随となって、九州の実家にかえっていくが、そこはすでに血縁の薄いものにのっとられていた。

「ふるさと」

なにゆえに
うらぶれはてて
故郷へはかへり来し
いまさらうらぶれの身
かへるまじきは
ふるさと
砂白き浜にしるさむ

鴨の羽

拾いし磯のさみしや

浜ゑんどうの花の紫

摘みとれど涙ながるる

座敷牢にとじこめられ、誰もみとるものもないまま、年末（昭21年）の寒風の日^にこの世を去った。

生前、白秋の死（昭17年）を新聞で知ったとき、彼女は、自分の赤心を示すために、次のように歌っている。

一時^{ひととき}の君が友とて生れきて女のいのちまことささげつ

<青い鳥としての佐藤菊子>

佐藤菊子は明治22年3月25日、大分市は奈良屋の次女として生まれた。高等女学校は江口章子と同じ、しかも同期生であった。白秋とは見合い結婚である。奈良屋は時計や宝石の商いをしており、明治のニューモードの店として栄えていた。大正10年4月より白秋との結婚生活が始まり、大正11年3月、長男隆太郎の誕生、大正14年6月、長女篁子の誕生があった。

白秋はこの夫人を、次のように歌った。

「雪溪の気品」

菊子よ、

おまへは雪溪の気品を保ってゐる

少くともおまへの瞳の中には

雪にうもれた馬酔木の濃青さがある。

またせせらぐ水の音もする。

その閑かな夜明の岩上を愛して

時おり色彩に饑ゑたわたしの鹿が出て見えるが

それでも近よれぬ雪溪の気品は

いつでもつめたい霧けむりを立てて明る。

また、子ぼんのうな白秋はその二人の子供のために、童謡をたくさんつくる

ことになったのである。

「二重虹」

虹だ、虹だ、隆太郎よ
ああ、あれはおまへのものだ
父さんは手をあげる
虹だ、虹だ、おまへの虹だ
向うの木までが手をあげてる

「月と帽子」

長いお縁えんの
いい月夜
誰か来てます
ほう、白い。

うちの篋こまご子だ
よちよちと、
お手手ふりふり
あかるいな。

硝子障からすしょうじ子に
光る葉も
ひかるみどりも
揺れています。

おお、おお、白い
雪帽子
月のひかりは
こぼれます。

彼の幸福さは、また次の童謡でもよくわかるというものである。

「ペチカ」

雪のふる夜はたのしいペチカ
 ペチカ燃えろよ、お話ししましょ
 むかし、むかしよ
 燃えろよ、ペチカ

雪のふる夜はたのしいペチカペチカ
 ペチカ燃えろよ、おもては寒い
 栗や栗やと
 呼びます、ペチカ

こうして白秋は、ふたりの子供をえて、日蓮宗の信仰ふかい菊子夫人によって、長い間忘れていた家庭というものの団欒を取り戻したのであった。⁽⁹⁾

菊子夫人は、昭和55年を迎えて、この3月に91才となられ健在である。白秋会には必ず毎年出席されていたが、3年ほど前よりひかえられるようになった。

IV

以上、白秋の代表的なこの「赤い鳥、小鳥」の童謡にでてきた「赤」「白」「青」の小鳥はそれぞれに、彼の生涯のある時期をささえた女性がシンボライズされているものであるとわたしはみたかった。

それはわたしが「北原白秋論」を出版した翌年、白秋会の帰途、小田原伝燈寺のこの童謡の碑の前になつて、黙禱していたときにはっと気づいたことであつたからである。

それ以後、深層心理学において“小鳥”が何を意味するかに関心をもっていた。最近、前衛歌人、塚本邦雄作品研究をすすめるうちに、こうしたシンボルと心理の関係が明瞭になってきたので、ここに以前から関心のあつたことをまとめた次第である。

しかし、この童謡をつくるときに白秋はそうしたことを意図していたのか、という必ずしもとそうではないようである。なぜなら、この作品は（大7.10）章子との結婚生活のときで、まだ菊子との生活のまえだからである。青い鳥は理想の妻ということになるろう。

第一の妻は白秋に文学の絢爛たる花を咲かせるのに重要な役割をはたした。そして第二の妻は、文壇から落伍したその白秋の貧窮のときを支え、再起への地盤をつくったのであった。第三の妻は、彼を平和な家庭生活というものに送りこんだのである。

また、「からたちの花」（大13.7）という有名な作品もあるが、ここでは白や青や金がでてくる。これを「赤い鳥、小鳥」と比較すると面白い。

「赤い鳥、小鳥」

「からたちの花」

赤（松下俊子）……………金（まろいまろい金のたま）

白（江口章子）……………白（からたちの花）

青（佐藤菊子）……………青（針のとげ）

このような対比がみられる。「赤」のところに「金」が入っているのである。彼はやはり「赤の時代」（松下俊子との生活）こそ、彼の文学にとって“金”であったことを回想していたのではないかと、わたしは解釈している。“からたちの花”の白さは、彼にとっては悔恨の白（江口章子との生活）であったことは言うまでもないことであろう。最後の「青の時代」に相当する“針のとげ”は、賢婦人佐藤菊子をむかえて、それまでの白秋のデカタンな酒豪ぶりに歯どめがかかったことと、合せ考えるとほほえましいものがある。

注

- (1) ロランバルト「テキストの快樂」124頁，昭53，みすず書房。
- (2) 興田準一編「からたちの花—北原白秋童謡集」14頁，昭32，新潮社。
- (3) 清水乙女主宰「たかむら」昭和42～49年まで。
- (4) 「白秋会」とは、白秋をめぐる血縁者、門弟、詩人、歌人、作曲家などが集まるもので、以前、1月25日、白秋の誕生日にしのぶ会をもっていたが、現在は会員高齢者多くなりしため、5月25日に改められている。
- (5) 北原白秋編「日本伝承童謡集成」第一巻“子守唄篇”36頁，昭49，三省堂。
- (6) 外林大作「夢判断」119～102頁，昭43，光文社。

- (7) Ad de Vries: Dictionary of Symbols and Imagery, p 47~47, 1974, North Holland.
- (8) 笹本正樹「現代修辭的教育学」170頁, 昭54, 杉山書店。
- (9) これら三女性については, 笹本正樹「北原白秋論」昭50, 五月書房, の第二章“華麗な破局”第三章“法悦の性愛”第四章“竹林の童人”で紹介している。
- (10) 「塚本邦雄作品研究」は, 現在, 白秋系結社誌“たむから”に掲載中のもので(33回), 彼の作品に表現されたシンボルと深層心理を追求している。